ティーチング・ステートメント

所属　保健医療学部理学療法学科

名前　宮坂智哉

作成日　2020年9月9日

【責任】

保健医療学部理学療法学科に所属している。主たる教育活動として、授業科目（理学療法学概論、リハビリテーション概論、リハビリテーション医学、理学療法学研究法、理学療法学評価学総合演習、理学療法治療学総合演習、理学療法学総論、総合理学療法学演習、チーム医療論Ⅱ、卒業研究、基礎理学療法臨床見学、理学療法評価学臨床実習、理学療法総合臨床実習Ⅰ、理学療法総合臨床実習Ⅱ）を担当し、専門科目のうち、1年生の初学導入、3年生の研究方法論の導入、4年生の卒業研究など、また臨床実習の学内準備及び学外臨床実習に関わっている。

【理念】

理念として２つの項目を設定している。

理念１；自律した、自発的、能動的、積極的な学びを身につけること

理念２；基本事項の理解と、基本的事項が応用や発展につながっているという視点を持つこと

理学療法学科の学生は、卒後多くが理学療法士の免許を取得し、医療や福祉の現場で理学療法士の業務を行う。臨床では対象者ごとに最良となるサービスを模索し、提供する必要がある。加えて医学や医療の知見は日々更新され、最良、最善の方法は常に変化する。このような環境で業務をして、対象となる方を支援するためには、自ら積極的に学ぶ姿勢を貫いていく必要がある。また、自身が最初に大学の理学部で物理化学を学び、その後医療の世界に入ったことで、医学や医療に関わる多くの知見が、基礎的な自然科学や専門基礎分野の学問が土台となっていることを学んできた。これは医学や医療が進歩をしても、同じくそれらの出発点は基礎的な学問や知見であると考える。このことから教育の実践に２つ理念を設定した。

【方針・方法】

理念1の「自律した、自発的、能動的、積極的な学びを身につけること」に基づいて、方針１，２及びそれらの方法を、理念2の「基本的事項の理解と、基本的事項が応用や発展につながっているという視点を持つこと」に基づいて、方針３，４及びそれらの方法を示した。

方針１　授業の自発的、能動的参加、学生間のコミュニケーションを学びに取り入れる。

方法１　グループ活動を多用している、学生の取り組む力に応じた課題を設定する。

方法２　グループ活動で調査、まとめ、発表を系統的に実施する(Zoom ブレークアウトセッション、Google Slide の共有作業など活用)。自発的に動くのが苦手な学生には、対応の良い学生をグループに配置することや、教員からの促しを設ける対応をする。

方法３　質問、学生の発言の機会をこまめに設ける。

方針２　授業時間を有効に使う、授業時間に集中して取り組んでもらう。

方法１　授業時間を厳守する。

方法２　閑話休題で日常生活や社会の動向などのトピックを入れる。

方法３　授業に集中してもらうため、20分から30分に一度小休止を入れる。

方針３　基本的な事項についての知識を確実に身につける。

方法１　授業前に説明資料や動画を挙げて予習を促す（HUS-moodle）。

方法２　大事な点について、繰り返しの説明や教材、表示、口頭など複数の手段で強調して説明をする。

方法３　授業の合間に小テストを設けてフィードバックする(HUS-moodle)。

方針４　今の学びが、関連分野や卒業研究、国家試験や卒後の臨床、仕事に結びつくことを意識付けする。

方法１　学びの内容が他の授業科目や卒業研究、国家試験や卒後の臨床、仕事に関連したり、役立つことを事例を交えて説明しながら講義をする。

【評価・成果】

教育活動の評価・成果として、授業アンケートで「この授業に意欲的に取り組んだ」の設問に対してそう思う(51%)、非常にそう思う(47%)の回答を得た。また授業で実施した課題レポートからは、「理学療法（士）へのイメージが具体的になり、今後の学習への意欲が向上した。」との感想が得られた（理学療法学概論2020年度前期）。同様に授業アンケートで「この授業に意欲的に取り組んだ」の設問に対してそう思う(46%)、非常にそう思う(44%)の回答を得た。また授業アンケートの自由記載結果から、「チーム医療の実践の在り方について、臨床実習で得た経験をもとに、より具体的な方法を検討でき、臨床に出てからも活用できそうだ。」との回答を得た（チーム医療論Ⅱ2019年度後期）。

【目標】

理念1の「自律した、自発的、能動的、積極的な学びを身につけること」及び理念2の「基本的事項の理解と、基本的事項が応用や発展につながっているという視点を持つこと」を達成するための目標として、学生の卒後も含めた将来の可能性を広げるような教育活動をする

ことを目標とする。短期的には、卒業生に協力してもらい、1年生を対象に理学療法士の業務や働きがいについての講演を実施し、早期からの職業イメージや学習の動機付けにつなげたい（2010年11月実施目標）。また長期的には大学発の卒後臨床教育研修や大学でのリカレントプログラムを設定し、自発的な学びや基本事項と応用、臨床の内容の連関性などを継続できる環境を整えていきたい。